

No.61

# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

久米桂一郎胸像

北村西望作（高さ六八・〇cm）



久米桂一郎は、慶應二年（一八六六）歴史学者として著名な久米邦武の長男として、佐賀城下八幡小路に生まれる。明治七年、八歳で上京し、同十四年の第二回内国勧業博覧会に出品された油絵に関心を持ち、同十六年には工部美術学校出身の藤雅三に師事するようになる。同十九年渡仏し、黒田清輝とともにラファエル・コランに学び、同二十六年帰国する。翌年には明治美術会展に出品をし、黒田と天真道場を開くなど、印象派風の外光描写の移入につとめる。同二十九年には、この年開設された東京美術学校西洋画科で講義を持つようになり、同年黒田らと白馬会を発会する。同三十一年の第三回白馬会展以降は新作発表をやめ、美術教育や美術行政の分野で貢献し、昭和九年六十八歳で歿した。

このブロンズ胸像は、長崎「平和の像」の作者として知られる北村西望の作品で、久米の歿後昭和十一年に作られた。この胸像は遺族から佐賀県に寄贈されたもので、同じ像が東京芸術大学構内にもある。

## 目 次

○久米桂一郎胸像 .....	1
○佐賀県立美術館開館案内 .....	2～3
○資料紹介・妙覺寺蔵「両界曼荼羅図」 .....	4～5
○資料紹介・久米桂一郎作「残醺下絵」 .....	6
○県内博物館案内（その15） .....	7
○博物館日誌、行事のお知らせ .....	8

# 佐賀県立美術館

10月8日開館

佐賀県は、その地理的環境から他県に比べいち早く大陸との交流により稻作農耕が行われ、それを物語る菜畑遺跡や丸山遺跡など、高い文化を原始・古代から育ててきた。

翻えって、近世末には、西欧の科学技術を積極的に導入するなど幕末の雄藩として活躍した。維新後の明治体制には、政治・教育・産業の面に多くの先駆者を輩出し、日本の近代化に大きな役割を果してきた。

芸術部門でも、明治初期の洋画家百武兼行や洋画家・美術教育者としての久米桂一郎、日本近代洋画アカデミズムの巨匠岡田三郎助、さらには高木背水、山口亮一などを相次いで世に送り、近代洋画壇で重きをなした。また、土佐派最後の画家高取稚成などの日本画や陶磁をはじめ、染色・金工などの工芸分野においても本県には特筆すべきものが数多くある。

このような、文化的遺産や先人たちの築いてきた文化・芸術を継承し、明日の佐賀を創造するべく昭和45年佐賀県立博物館が設置され、今日まで様々な展示活動や資料の収集・保管、調査・研究を通して、広く社会教育に尽力してきた。



美術館全景

しかし、今日的創造活動の多様化に伴い、博物館の美術・工芸部門では構造・照明・施設の面で不充分な点が見えるとの声が、県民の間に高まってきた。このような要望に応え、昭和55年に美術館の設置が決定され、58年10月に開館の運びとなった。

ここに完成した新しい美術館は、4つの展示室・屋外展示場・画廊・研修室・500席のホールを備えており、美術に限らず広く芸術活動全般の中核として機能するよう、博物館・美術館を一体化し立体的な運営ができるよう、その組織と施設に工夫がなされている。



美術館・博物館1階平面図

(1)博物館・美術館入口

(2)博物館ロビー

(3)博物館・美術館連絡通路

(4)美術館通路

(5)屋外展示場

(6)1号展示室(A)

(7)1号展示室(B)

(8)2号展示室

(9)3号展示室

(10)4号展示室

(11)荷解場

(12)事務室

(13)リフト

(14)ホール

(15)美術館ホール入口

(16)和楽屋

(17)洋楽屋

(18)画廊

(19)研修室

(20)収蔵庫

(21)特別収蔵庫(1)

(22)特別収蔵庫(2)

(23)写真室

①～⑤洗面所

⑥身障者用洗面所

○開館時間  
「展示室、画廊、研修室」  
午前9時～午後4時30分  
「美術館ホール」

午前9時～午後10時  
○休館日  
原則として月曜及び祝日  
の翌日  
12月28日～1月4日

○観覧料

常設展 (美術館・博物館共通)	個人	20名以上団体
小学生・中学生	70円	50円
高校生・大学生	150円	100円
大人	200円	150円

美術館建築概要

敷地面積	7986.0m <sup>2</sup>
建築面積	3644.37m <sup>2</sup>
延床面積	4238.38m <sup>2</sup>
構造	鉄筋コンクリート造 一階建、一部二階建
総工費	15億1,560万円
設計者	(柳安井建築設計事務所
施工者	松尾・住友建設共同企業体

施設概要

区分	階	室名	床面積m <sup>2</sup>
展示施設	1	1号展示室	366
	1	2号展示室	250
	1	3号展示室	230
	1	4号展示室	204
	小計		1,050
収蔵施設	2	収蔵庫	319
	2	蔵前室	26
	1	荷解場	120
	1	倉庫	79
	小計		544
教育施設	2	画廊・準備室	137
	2	研修室	135
	小計		272
管理研究施設	1	事務室	148
	2	写真室・暗室	58
	1,2	機械室	80
	2	倉庫	5
	小計		291
ホール施設	1	ホー...ル	529
	1	和楽室・洋楽室	39
	1	準備室	18
	2	映写室	12
	1,2	機械室	47
	1	倉庫	13
	1	便所	34
	1	ワイヤ工	126
	小計		818
共用施設	1,2	休憩室	56
	1,2	便所	93
	1,2	廊下・階段等	974
小計		1,123	
合計		4,098	

美術館沿革

昭和年月日	事項
55・2・1	県政百年記念事業の一環として、58年開館を目指し、佐賀県立美術館建設決定
4・25	「佐賀県立美術館建設委員会」設置
12・10	安井建築設計事務所による基本設計採用
56・3・31	安井建築設計事務所による実施設計完了
10・26	美術館建設着工
58・1・31	美術館建設完工
4・1	「佐賀県立美術館」設置
10・8	佐賀県立美術館開館予定

## 資料紹介

# 妙覚寺藏両部曼荼羅図 鎌倉時代

桐野山妙覺寺は、県西部の多久市南多久町、国鉄唐津線東多久駅から南西4km程の桐野山の中腹にある。

さて本寺は、天平年中（西暦729～749年）聖武天皇の勅を受け行基が創建したと伝える古刹であるが、行基没後は庵寺の如くなり漸く大同元年（806）再興されたがその後の数度罹災し、宝物記録は悉く鳥有に帰した。天正元年（1573）の火災には造竜寺長信が再興したが、明治14年再び罹災し現在は僅かに本堂・観音堂・庫裡を残すのみとなっている。天台宗曼珠院の末寺。

なお本寺は、伝慈覚大師（一説に聖徳太子）作木造不動明王立像を本尊とし、伝行基作木造聖觀音立像、伝弘法大師作石造四天王像などを伝えている。

本寺に伝わる両部曼荼羅図は、弘法大師の作との伝承を持つ古図であり十二院よりなる胎藏界と九会よりなる金剛界となりっている。概要は以下の通りである。

絹本着色、掛幅装

法量 胎藏界 縱106.4×横87.2cm

金剛界 縱106.4×横87.2cm

金剛界各会は30.6×25.0cm前後

三幅一鋪の絹織は、画面向て左より各々

胎藏界 19.0、48.8、19.4cm

金剛界 18.7、50.0、18.5cm

また、現在取り外されている杉軸には、胎藏界・金剛界各「曼荼羅之筆者詫魔之法眼 肥前國多久庄桐野山妙覺寺院主坊當住侍智城房澄栄 慶長十一年丙午文月吉祥日」「肥前國多久庄桐野山妙覺寺院主房當住 常住侍智城房澄栄 寄進之願主太寛房澄空賈々使寶性房澄實 慶長十一年丙午文月吉日 同節山次兵衛主人書」（原文縦書・慶長十一年は西暦1606年）と墨書きがある。また、杉箱蓋裏に「茂躋公表具御寄進辨要代」の墨書きがある。

胎藏界は、東門から釈迦院の枳迦牟尼仏までの画綱が剥離している。五色の界線からはみ出た中台八葉院や、虚空蔵院の金剛蔵・千手觀音各菩薩の九重蓮華座あるいは最外院の諸尊の密集が目を引く。図像的には以下のことが見られる。中台八葉院無量寿如来が禪定印を結び、宝輪如来が右肩を露わにせず、開敷華王如来も偏頭右肩である。除蓋障院の悲趣菩薩が右手を垂下せず、悲愍菩薩が正面向きである。虚空蔵院の殆どが正面向きである。蘇悉地院の孔雀王母が右向きである。最外院の羅利・羅利女の尊位に童子形が描かれる。観音院・金剛部院の眷属数が各16・12尊である。

金剛界は各尊に月輪があり、理趣会の二金剛女や各会二十天の幾尊かを除き正面向きである。三昧耶会中央輪の宝波羅密が隆三世三昧耶会のものとなり、賢劫十六尊の不空見は一器の独鉢であり、賢護は宝瓶である。微細会は、各尊共半三鉢ではなく、円頭光を担い、南方輪金

剛光が左手を垂下する。供養会では、毗盧遮那のみ偏頭で、他如来は偏頭右肩である。降三世会も、毗盧遮那は不明だが、他如来は偏頭右肩である。降三世三昧耶会では、東方輪金剛喜・金剛薩埵が共に三昧耶会のもので、北方輪金剛牙・金剛拳が入れ換っている。

さて、以上のような特徴を、胎藏界について見てみると、まず観音院・金剛部院の各眷属が16・12尊であることは、台密系であると考えられる妙法院版本などと一致し、<sup>(1)</sup>興味深い。また、観音院の多羅菩薩・金剛部院の離戲論菩薩各左前に金剛侍者が位置する点も台密系の一特徴に合致する。<sup>(2)</sup>しかし、中台八葉院宝幢・天鼓雷音の尊位交換や、虚空蔵院金剛蔵・千手觀音蓮華座前のか供養壇は見られず、その他の台密系の特徴も認められない<sup>(3)</sup>。

従って、本図は、金剛界も九会曼荼羅であり、現段階では台密系とは言い難く、今は現図系の一種としておく。

次に、各尊をみると、最も作行のよい胎藏界中台八葉院や金剛界一印会毗盧遮那如来は、中央を連続しない反弧形の細長い眉や切れ長の目、小さな唇を持った丸顔で、例えば神護寺の赤糞迦や東博本虚空蔵菩薩像など、12世紀の面相の表現を連想させる。しかし一方、13世紀の高山寺本仮仏母像の体験に見られるような立体感や腹部のしまりが認められる。また、例えれば胎藏界・金剛界各毗盧遮那は、簡略な宝冠・瓔珞・環鎖を付け、華美に走らす、過渡の時代性を示している。

技法面では、金剛界一印会に認められる裏彩色や全体に施された破綻のない截金、金・胎各辯毗盧遮那光背・蓮弁の絹綿彩色など伝統的である。しかし、絹綿彩色については、その配色が胎藏界中台八葉院・金剛界一印会各毗盧遮那光背は「朱、緑、黄、青」「朱、緑、青、黄」と華やかでありますながら、具を施す（白色顔料を混入する）など暗い色調となり、これも時代の過渡性を示している。

以上より、本図は所謂藤原様式が漸く薄れ、新たな宋風が移入されるまでの余り早くない時期、即ち鎌倉時代中期から後期にかけて制作されたものであり、13世紀後半頃に位置付けるのが適当であると思われる。

最後に、「曼荼羅之筆者詫魔之法眼」については、この詫魔は、東密系を中心に12世紀後半頃より室町時代初期にかけて活躍した「詫磨」派を意味していると思われる。しかし、本図には、東寺本十二天画像などに見られる濃淡やかすれを伴った筆勢と圭角のある肥瘦線や、動勢をはらんだ所謂宋風の写実性は認められず、所謂詫磨派の作品とは異なっている。なお詫磨は「金剛」と同様当時はしばしだけ古画の権威付けのために書かれた。(学芸員)

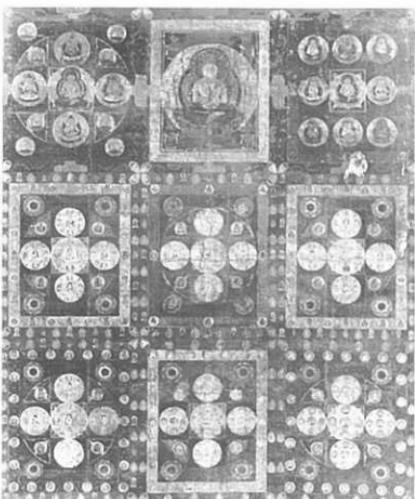
## 主要参考文献

- ①高田修「白密の両界曼荼羅について」『仏教美術史論考』(中央公論美術精選)、昭和44年) 所収
- ②高田修「東北の南北両界曼荼羅について—いわゆる「真言院曼荼羅」」、横河一郎「(美術研究) 189」昭和21年
- ③石田尚義「両界曼荼羅」、大阪・四天王寺蔵一宮密系両界曼荼羅の考察、「ミュージアム」172) 昭和48年
- ・小京都文化会編「小京都譜」昭和48年復刻
- ・石田尚義「曼荼羅の研究」、東京美術 昭和60年
- ・石田尚義「密教画」(日本の美術33) 至文堂 昭和44年

# 妙覺寺藏両部曼荼羅図



胎藏曼荼羅



金剛界曼荼羅



中台八葉院（胎藏曼荼羅部分）



一印会（金剛界曼荼羅部分）

## 資料紹介

### 久米桂一郎作「残暉下絵」

季節は夏。日没後あたりには、まだ明るさが残る。ようやく昼間の灼熱から解放されたたずむ草木、早くも暗闇の中に溶け入ろうとする遠くの森、鮮やかに空を染める夕日。いくら夕暮れどきが感傷的な気分にさせるとはいえ、この絵に漂うやりきれなさはどうだろうか。

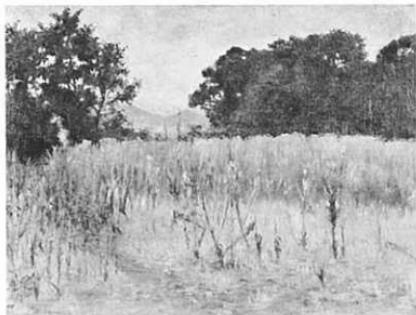
明治31年（1893）に制作されたこの作品は、同じ年の10月5日から開かれた白馬会第3回展覧会に出品された「残暉」の下絵をなすものである。「残暉」には鉛をかついた後ろ姿の農夫が描かれ、仕事を終え帰り行く情景をなしている。ここで紹介する下絵をもとに「残暉」が描かれたのであろうが、下絵は印象として農夫の帰った後の情景のように感じられよう。

ともあれ「残暉」は50号の大作で、「林檎拾い」（明治24年作）・「晩秋」（明治25年作）・「秋景」（明治28年作）といった作品の延長上にあるといわれ、これらは今日久米の代表作とされているものである。久米の特色である繊細な筆致によるアリケートな外光表現が、風景に人物を配するとき生かされ独特の情趣を起こすように思われる。

この作品が描かれた明治31年という年は、この年の白馬会展をもって久米の新作発表が終わりをつげている。もっとも、2年後の明治33年のパリ万国博覧会、あるいは明治38年の白馬会第10回記念展覧会にも出品し、特にパリ万博では「残暉」が褒状を受けてはいるが、出品作品はすべて旧作である。久米の新作発表の中止は、明治29年からはじめた東京美術学校での講義が忙しくなり、講義に専念するようになったことに起因するといえる。

久米は、東京美術学校西洋画科で美術解剖学と考古学を担当することになるが、特に美術解剖学は前任者の森鷗外の講義が理論中心であったのに対し、東京帝国大学から屍体をとりよせ助手に実際に解剖させ、生徒たちにじかに切斷した手足を手に取らせて模写させるという実践的なものであった。そのため、美術学校内に解剖室を新たに設けさせたほどに徹底したものであった。また、明治30年には森鷗外と合著で『芸用解剖学・骨論之部』という本を出版している。鷗外の日記から二人がこの本にとりかかったのが明治31年頃であることが知られる。

久米桂一郎の娘である久米晴女史の回想によると、美術学校でのことについて「また教師としての態度は実は真面目で、冬の朝でも暗いうちから家を出、一番に学校に着き、始業のベルが鳴るのを待っていたそうです」（父桂一郎の想い出）久米晴、久米美術館図録。以下引用はこの図録による。）とあり、さらに「このように晩年は、殆ど芸大（当時の美術学校）での指導に専念しておりましたから、私など物心のついた頃は、絵筆を持っていました



35.5×45.5 油彩、画布

父の姿を見たことは殆どありません」とある。このように久米がいかに美術学校での講義に専念していたかが窺え、最後の新作発表を白馬会展で行った明治31年頃から、本格的になってきたことが察せられる。

さらに晴女史によると、久米の性格について「……どちらかといえば繊細、努力型で堅実主義というタイプでした。また、極端なくらい几帳面で、曲ったことは絶対に容赦しないところがあり、融通性がなかったと思います」とある。僚友の黒田清輝が多忙を極めながらも最後まで画作をつづけたのに対し、久米はその「融通性」のなさから中途半端ではいられず、父邦武ゆずりの頑固さで教育者となるべく決断を下したように思われる。

いずれにせよ、日本のアカデミズムの形成において黒田が主に実技の面で影響力があったのに対し、そのバッカボーンとなる教育あるいは教育行政の面ではたした久米の功績は大きかったと言わねばならない。

明治29年の白馬会第1回展の出品数が10点、翌年の第2回展が16点、そして第3回展ではわずか3点と激減し、以後新作発表はなくなる。「残暉」とこの下絵の意義の一端も、制作された年がそれまでの嘱託教員から教授となっただことに象徴されるように、画家から教育者への移行の年であったということに存している。「残暉」という画題に託したものと、久米の胸中に察しようとするのはふか読みだろうか。

最後に、この作品には右下にサインと1898年の年記の他に「A Monsieur Soné souvenir de l'été」つまり「ソネ氏へ、夏の思い出」と記してある。「ソネ」という人物に関して、この作品が三菱関係者のところから発見されたことから、同じ佐賀県出身で当時、三菱に入社していた建築家曾祢達蔵（1856～1937）のことか、あるいは、久米も鑑査官となって参加した明治33年のパリ万博で、事務局総裁として手腕をふるった当時の農商務大臣曾祢荒助（1849～1910）とする説がある。

（学芸員 福井尚寿）

## 県内博物館案内 その15

### 唐津曳山展示場



(県内博物館案内その15)

#### 唐津曳山展示場

- 所在地 唐津市西城内 6-33
- 交通の便 国鉄唐津駅下車、徒歩10分
- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 年末・年始 12月28日～1月3日
- 入場料 大人（15歳以上）200円  
小人（4歳以上15歳未満）100円  
(ただし30人以上の団体が入場する場合は、1人につき2割引)

#### ○環境と歴史

城下町としての唐津の町は、慶長の頃寺沢志摩守広高が唐津城を築いた時に始まり、唐津の産土神である唐津神社の秋祭りは築城前の古くから行われていた。町人衆の篤い敬神の真心が、文政2年（1819）刀町の赤獅子の奉納に現われ、以来明治9年までに15台の曳山が次々と奉納（紹屋町黒獅子は、明治に損滅）、これら貴重な町人文化の遺産は幾多の苦難に耐えて守り難がれ曳き続けられてきた。この「唐津くんちの曳山行事」は昭和15年2月、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

豊穣の秋祭り「唐津くんち」は、毎年11月3～4日に行われているが、2日の夜は宵曳山と呼び、14台の曳山は飾り提灯に彩られ、万燈に映える金銀丹青も鮮やかに華麗なる巡行が展開される。

翌3日は、唐津大明神が御旅所へ御神幸される日で、神輿に供奉する曳山は江戸時代の町火消装束を今に伝えており、黒木綿の腕輪・腹掛・股引等に身を固め、各町ごとに意匠をこらしたいなせな法被姿の曳子たちが、鉦・笛・太鼓の勇壮豪快な曳山囃子につれ市中の巡路を引き回る。なかでも、御旅所のある西の浜での曳き込みは「唐津くんち」の圧巻で、重さ2～4トンもある曳山が轍も深く競い合い死力を尽して砂地に挑むその姿は、壯快無比な景観であり、数万の観衆を魅了する。続く4日は、御神幸ではなく町民の祭りとして、ほぼ前日と同じ町々の巡路をゆっくりと引き廻る。

「一閑張」と呼ばれる工法によるこの曳山は、木組みや粘土の原型あるいは木型の上に和紙を数百回張り重ね

麻布を張り、幾種類もの漆で塗り金銀を施して仕上げたもので、完成までは2年前後の歳月を要したと伝えられている。多種多様な姿態の造型美は稀に見る優れた工芸品であり、佐賀県の重要な有形民俗文化財に指定されている。最近は海外からの引合いも多く、昭和54年2月22日から25日までフランスのニースに5番山「鯛」、昭和56年3月26日～29日までアメリカディズニーランドに10番山「上杉謙信の兜」がそれぞれ出された。

この展示場には、曳山14台の他、唐津出身の日本画家富野淇園によって描かれた「唐津くんち行列図」が展示されている。これは七幅続きの大図に西ノ浜御旅所から西ノ門付近に及ぶ15台の曳山と曳子の他大名行列・奉納相撲・侍・町人・物売りなど千人に上る人物を配しており、江戸時代末期の風俗画である。

以前は唐津神社参道に曳山の収蔵庫があったが、唐津市文化会館の建設に伴い唐津曳山14台を一般に常時観覧できるよう、その附属施設として昭和45年唐津市曳山展示場が建てられた。

#### ○施設の概要

観覧場	810m <sup>2</sup>	曳山修理場	42m <sup>2</sup>
曳山倉庫	41m <sup>2</sup>		

#### ○展示資料

- 1番山 赤獅子（刀町 文政2年）
- 2番山 青獅子（中町 文政7年）
- 3番山 浦島太郎と亀（材木町 天保12年）
- 4番山 源義経の兜（呉服町 天保15年）
- 5番山 鯛（魚屋町 弘化2年）
- 6番山 鳳凰丸（大石町 弘化3年）
- 7番山 飛龍（新町 弘化3年）
- 8番山 金獅子（本町 弘化4年）
- 9番山 武田信玄の兜（木綿町 元治元年）
- 10番山 上杉謙信の兜（平野町 明治2年）
- 11番山 酒呑童子と源頼光の兜（米屋町 明治2年）
- 12番山 珠取獅子（京町 明治8年）
- 13番山 鮫（水主町 明治9年）
- 14番山 七宝丸（江川町 明治9年）

富野淇園作「唐津くんち行列図」

（主事 森永 茂）



展示風景

**博物館日誌** (昭和58年4月1日～7月31日)

4月1日 職員人事異動

常設展「佐賀県の歴史と文化展」(4月24日迄)

5月7日 県政百年記念「佐賀県の百年展—日本の近代化につくした先覚者とその風土—」

開場式(6月12日迄)

**昭和58年度行事のお知らせ**

6月23日 佐賀美術協会展(7月3日迄)

7月6日 書作家協会展(7月10日迄)

7月13日 二科会佐賀支部展(7月17日迄)

7月20日 独立C・S展(7月24日迄)

7月25日 晓星女子大学校 権 烹耕氏来館

7月27日 緑光会会展(7月31日)

7月29日 博物館・美術館協議会

**常 設 展**

展覧会名	会期	観覧料	会場	展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県の歴史と文化展	10月8日(火) ～3月31日(火)	大人200(50) 大高150(100) 中小 70(50)	博物館	近代の美術・工芸	12月20日(火) ～3月31日(火)	大人200(50) 大高150(100) 中小 70(50)	美術館

**企 画 展**

展覧会名	会期	観覧料	会場	展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県勤労者美術展	8月3日(水) ～8月7日(日)	無料	博物館	佐賀県高等学校芸術祭 美術・書道展	11月13日(日) ～11月20日(日)	無料	博物館 美術館
七夕書道展	8月10日(水) ～8月14日(日)	無料	博物館	佐賀県美術展	11月29日(水) ～12月11日(日)	無料	博物館 美術館
九州新工芸展	8月18日(木) ～8月28日(日)	無料	博物館	米国・ブルックリン 美術館秘蔵品展 エジプトの美	1月7日(火) ～1月29日(日)	未定	美術館
日 展	9月6日(水) ～10月2日(日)	一般800円 大高500円 中小300円	博物館	書初め展	2月8日(水) ～2月12日(日)	無料	美術館
美術館開館記念展 近代・九州の洋画家たち	10月9日(日) ～11月6日(日)	大人500円 大高250円 中小150円	美術館	エマ会展	2月15日(水) ～2月19日(日)	無料	美術館
よみがえれ佐賀展	10月8日(火) ～10月16日(日)	無料	博物館	佐賀大学教育学部 美術工芸科卒業制作展	2月22日(水) ～2月26日(日)	無料	美術館
第4回 佐賀県学生書道展	10月19日(水) ～10月23日(日)	無料	博物館	九州グラフィック デザイン展	2月29日(水) ～3月4日(日)	無料	美術館
学童美術展	11月2日(水) ～11月6日(日)	無料	博物館				

\*都合により上記計画を一部変更することがあります。

**人 事 異 動** 昭和58年4月1日付

○転 入

主 事 野田布見(議会事務局より)

○転 出

副館長 古賀礼三(広報公聴課長へ)

主 事 江副幸子(児童家庭課へ)

○昇 格

副館長 手塚静雄(学芸課長より)

学芸課長 尾形善郎(資料係長より)

資料係長 森醇一朗(資料係学芸員より)

○新 採

大隈博文(学芸員)

**○館報標題の変更についてお知らせ**

佐賀県立美術館が10月8日オープン致します。この美術館は、これまで県民文化振興の拠点として機能してきた佐賀県立博物館と一体となって運営されます。これに伴い、これまでの「佐賀県立博物館報」を「佐賀県立博物館・美術館報」と標題を変更いたします。

博 物 館・美術館報	第 61 号
発行年月日	昭 和 58 年 8 月 1 日
編 集	野 村 綱 明
発 行	佐賀市城内 1 丁目15～23
	佐 賀 県 立 博 物 館
	佐 賀 県 立 美 術 館
印 刷	佐 賀 印 刷 社